

第1回川崎市史市制 100 周年記念版編集懇談会 会議録（摘録）

- 1 日 時 令和6年10月31日（木）午後7時～午後9時
- 2 場 所 川崎市総合自治会館 大会議室3
- 3 出席者
 - (1) 委員 阿久津委員、大城委員、大島委員、落合委員、嶋田委員、鈴木（ひ）委員、鈴木（勇）委員、反町委員、高田委員、竹内委員、中村委員、にしにし家委員、羽賀委員、福森委員、望月委員
 - (2) 市長代理 総務企画局 白鳥局長
 - (3) 事務局 総務企画局コンプライアンス推進・行政情報管理部：小野部長
総務企画局公文書館：相原館長、堀切担当係長
TOPPAN 株式会社：浅井、大高、鶴岡
株式会社トップノック：片岡
 - (4) 関係者 市史だよりライター：早川
株式会社アーク・コミュニケーションズ：佐藤、渡部
- 4 次 第
 - (1) 開会／市長メッセージ
 - (2) 委嘱状の交付
 - (3) 挨拶／事業の説明
 - (4) 委員の自己紹介／Q & A
 - (5) 議題説明
 - (6) 円座 座談会
 - (7) 総括／全体Q & A
- 5 公開・非公開の別 公開
- 6 傍聴者 なし

（次第一） 開会／市長メッセージ

事務局から挨拶

（市長からのビデオメッセージを視聴）

（次第一 2） 委嘱状の交付

（白鳥局長から委嘱状の交付）

白鳥局長から挨拶（以下、概要）

以前の市史は学術的なものであり、大学教授などで組織する編さん委員会と我々公務員が制作し、出来上がったものです。ただ、今回は、あらゆる世代の方に、興味を持っていただいて、見ていただいて、川崎の歴史などを知っていただくことによって、「うちのまちがいいな」や「ここに住んでいて本当によかったな」など、そのように思っただけのような市史を作ろうというのが狙いでございます。そういうことは、我々公務員があまり得意としていないものです。そんな中で、我々のあらゆるチャンネルを使い、皆さまをこうやってご招待させていただきました。今日は皆さまにお集まりいただき、お顔を見させていただき、「このメンバーなら、きっと素晴らしい市史ができるだろう」と思いました。楽しみにしております。製作期間がちょっと長くなりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

（次第一 3） 挨拶／事業の説明

事務局の紹介

事務局から事業の説明（川崎市史 100 周年記念版の制作の概要）

懇談会のルールを説明

（次第一 4） 委員の自己紹介／Q & A

各委員から自己紹介

阿久津委員

私は宮前区に 30 年以上住んでいるデザイナーで、大学生の子どもがいます。9 年前から宮前区、高津区のママたちと一緒に、地域で楽しく過ごせる場所や情報を届けるフリーマガジンを年に 1 度のペースで企画、制作してきました。今年で 8 号目を迎え、私はデザインや SNS での発信、全体のディレクションを担当しています。

「遠くに行かなくても近所で楽しめる」、「ママが笑顔でいることが家族の幸せ」というメッセージを発信し、ママたちの活動を応援しています。記念市史の懇談会では、ママ目線の経験を生かして貢献できればと思っています。今関心を持っていることは、今ちょうど緑化フェアのデザインに携わらせていただいております、たくさんの方にこの緑化フェアを知ってもらえたらなというところで、関心があります。

大城委員

私は「こどものまちミニカワサキ」というイベントを年に 1 回やっております。これを始めたのは 7 年前です。私自身は元々九州地方の出身です。仕事をする段階で東京にやって来ました。都市計画という職を通して、長く関わっており、タワーマンシ

ョンのアセスメントみたいなことなど、色々な経験があります。その後、子育てのフェーズになって、そういう仕事が忙しく、だんだん地域に入っていくという形で、仕事が変わってきているという状況です。

私自身がまちに興味を持ったのは、小学校3年生の時に、まち探検をしたことがあります。自分の校区を探検して、冊子にするときもありました。最近私の子どもたちは小学校に通っており、記念の冊子を創立60周年に出して、自分もこれを見たことでまちを好きになったな、ということ进行すごく思い出しました。自分はまちづくりの仕事をしてきましたが、子どもたちは、自分たちが育っていく大きさによって、だんだんまちの大きさの認識が変わっていきますね。小学校校区から中学校校区になっていって、もうちょっと市になっていって、県になって、他の地域にもなる。子どもたちと一緒に「子どもたちの大きさに合わせて、まちを認識していけたらいいな」ということ进行すごく思っているので、そういう思いも込めて、小学生から中学生、高校生ぐらいが、自分たちの認識でまちを自分たちで作ってみるという遊びをするという企画ですね。

ですので、私も今回、委員にさせていただいたので、小学生なら小学生の大きさで、中学生なら中学生の大きさで、大人は大人の認識で、まちを楽しく把握できるようなことに貢献したいなと思っています。

大島委員

川崎商工会議所の企画広報部で担当部長をしています。商工会議所とは、どういう組織なのかと思われる方もいらっしゃるでしょうが、地域総合経済団体ということで、普段は市内の中小企業の皆さんのお仕事を良くするような、例えば融資したりとか、経営の悩み事のご相談に乗ったりする仕事をしている会社でございます。

また商工会議所は会員組織ですので、私の部署は、会員向けの機関誌を作って、企業の皆さんのご紹介をするような業務をしています。そういうことで、多分うちの会社に依頼が来た際に私が来るようなことになったのだと思います。私個人としては、川崎生まれ、川崎育ちということで、高津区内の小学校、中学校、あと市内の高校、そういう形で、最終的に川崎で仕事をしているというような人間でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

落合委員

青山学院大学の落合と申します。大学の所属は私だけのようですけれど、川崎市史の本格市史に自分はちょっと関わってまして、近世のほうの話題について書かせていただきました。ただ、今回は全く別のコンセプトで作られるということで、それはそれですごく楽しみにしております。それで、ちょっと自分の自己紹介をさせていただきますと、大島さんと同じように、私も川崎生まれ、川崎育ちでありまして、多摩区内で生まれまして、小学校は宮前区内の小学校ということで、中学校、高校は別だ

ったし、あと15年ほど中国地方にいました。今はまた宮前区に戻っております。その点で、今回、川崎市史をやるということで、このような懇談会の委員に入れさせていただいて、関心としては、市史をどういう感じで作るんだろうなというのがすごく楽しみだということと、それから皆さんみたいな同じ川崎にいらっしゃる方たちと親しくなれるということもすごくワクワクして楽しみにしております。

嶋田委員

かわさきドリームミュージカル実行委員会の代表の嶋田と申します。川崎市民になりまして20年目になります。生まれは北関東ですが、どちらかというによそ者でございます。よそ者で、川崎市民になって、川崎って面白いなという目線で活動しております。今やっているかわさきドリームミュージカルというのは、昨年度、幸区の提案型共同推進事業に採択していただきまして、川崎市の幸区のバックアップの元に行っているミュージカル団体です。

物語は、幸区の日吉地区に加瀬山という夢見ヶ崎動物公園のある山に関する歴史物語です。室町時代に、江戸城を最初に建てた太田道灌という方が、江戸城を建てる前に、日吉の加瀬山にやってきて、そこでお城を建てようとしたが、ちょっと色々ありまして、やめて、その後加瀬山が別名で、夢見ヶ崎っていう名前がついたということがあります。その加瀬山が、なんで夢見ヶ崎という名前になったのかというところを膨らませて、ミュージカルの物語にしました。原作は私のほうで書かせていただきまして、次回作も川崎の歴史をテーマにしようと思っていますけど、他にも面白い逸話とか説話とかがあったら、エンターテインメントにしたいと思っています。

仕事は、広告関係をやっているとして、コマーシャルなどを行っていました。このかわさきドリームミュージカル以外に、川崎市のPTAとか、地域教育会議などもやらせていただきまして、今後何かお手伝いする時に、子どもたちが必要とか、そういうのもあれば、川崎市PTAとか、地域教育会議とかそういったところにも声とかかけられるかなと思っています。チラシがお手元にいったかと思いますが、3月22、23日に幸市民館のホールで、公演を行います。絶賛ですね、スポンサー・後援をお待ちしております。また、先週に商工会議所さんからご後援の承諾をいただきまして、どうもありがとうございます。観光協会さんからもいただきました。川崎の歴史とか文化とかをエンターテインメントとしてみんなに広めていきたいというような活動をしています。

鈴木（ひ）委員

日本だじゃれ活用協会の鈴木ひでちかと申します。「だじゃれは世界を救う」を思いまして、だじゃれを活用して世の中に笑顔と希望を拡げる、そういう活動をしています。今年で10周年ちょうど迎えて、9月1日も、武蔵小杉にある平和館で「ダジャフェス」という「まる一日だじゃれ」という活動をですね、武蔵小杉だけ

に、こすぎる一日ということでだじゃれをやりました。私は、だじゃれ活用協会以外に、いろんな活動をしていますけど、その中で特に子どもの言葉の感度を高められないかということで、だじゃれは語彙力とかの教養がないと作るのが結構難しいので、だじゃれを通して子どもたちに言葉への関心を持ってもらおうということで、小学校でだじゃれの授業をやっています。それから、特に学童保育について、わくわくプラザという川崎市の小学校の児童保育で、そこで多分半分ぐらい埋まったのかなと思いますが、「だじゃれの時間」をやって、子どもたちにだじゃれ遊びを通してやっています。子どもが今年、大学生と高校生になったのですけれども、高津区内の小学校に通っていたものでして、PTAをやっていた流れから広がったところがあります。生まれは多摩区内です。あとは今回分かりやすく楽しく伝えるということがコンセプトということで、最初はなんで自分が呼ばれたのかと思ったのですが、やっていることが活かせるのかなと思ったのと、事務局からの説明を聞いて、決定した次第です。

委員は15名ですね、「市史」という言葉が一杯飛び交っていて、「しし」と言えば四四十六だけど、15人だなと思いながら聞いておりました。なかなか普段一緒にできない皆さんとの交流も楽しみにしていますので、2年半よろしくお願いします

鈴木（勇）委員

市民ミュージアムは5年前に台風で被災しまして、現在、その資料の修復とかレスキューなどをしながら、展示とかを外で会場を借りながらやっております。その副産物としてはこれまで小学生4年生の皆さんが、二ヶ領用水の勉強するために館に来ていただいて、いろいろな体験をしていただいていた。被災後は、こちらの方から各小学校に出向いて出張授業をやっています。年間数十校を回っていますが、やはり回ってみると、この川崎市、やっぱり広いんですね。地域と地域ごと、小学校と小学校ごと、こんなにも違うのか、こんなに多様性があるのか、やはりそれぞれの土地には非常に特徴があるなど感じております。

もともと私は、近代の都市史みたいなことを研究してきているわけですが、どちらかというとフィールドが東京寄りにあったわけです。5年前、ちょうど被災する半年ぐらい前にこちらにきまして、それから、必死になって川崎市の歴史について勉強しているところです。ですから、関心のあることと言えば、やっぱり川崎市の歴史、特に川崎市の近代とか、近現代の歴史をどう考えていくのか、どう描いていくのか、そういうことについて今考えているところです。どうぞよろしくお願いします。

反町委員

この会議では、一般社団法人川崎市商店街連合会という組織の、いわゆる商店街組織の理事と青年部長という立場で呼んでいただいたわけです。私自身の本業としては、NPO法人のカワサキミュージックキャストと申します。団体名に「カワサキ」を入れているぐらいですから、川崎に特化した音楽系のコンサート、イベント、これ

をとにかく川崎市の音楽のまちづくりというものを20年やっておりまして、それを民間の立場で徹底的に現場目線、あるいは音楽家・ミュージシャン目線で支えて、実際に良いものを作っていく、そういう活動というか、本業をしています。1年中、イベントのことを考えたり、やったりしているわけで、そういうことを普段やっています。

そんな活動を通して、実は私、商店街に店を持っているわけじゃなくて、ただ、いろんな活動を通して、まちを支えていく上で、この商店街というものが絶対に欠かさない大事なものである中で、いわゆる商店街の店舗の数や会員数がものすごいペースで減っていつているんですね。そんな中でこれらが減るのは食い止められないところもあります。ただ、それでも盛り上がる場所は盛り上がっています。ここ中原区ですごく有名で、有力な商店街があったりして、そういったところの良さを活かしつつ、そうでないところもなんとかやっていこうというので、いろいろやっているうちに巻き込まれた側です。本当に商店街のことを大事に思っているのも、商店街活動をしながらか本業の方も頑張っているところなんです。私自身は生まれも育ちも川崎で、44年間、このまち、中原区内に住んでおります。

今、関心があることは先ほど阿久津さんからもお話いただいたのですが、全国都市緑化かわさきフェアという市制100周年を代表する事業と言ってもいいと思いますけど、富士見公園、等々力緑地と、生田緑地に三会場をコア会場として花と緑のフェスティバルの開催をしているんですね。これが全国持ち回りのフェスということで、今年100周年にぶつけて川崎でやっているわけです。今まさに1ヶ月間の会期の真っ最中で、ちょうど3分の1の10日ぐらい終わったところです。そんな中で、非常に大規模で、私、その等々力緑地という会場のディレクターを担当させていただいておまして、今日も等々力会場からそのまま直行してここに参りました。ぜひ皆さんにもこの機会に、緑化フェアの3会場を、全部とは言いませんので、1会場でも足を運んでいただきたいと思います。

最後に、私はとにかく川崎のために今までやってきまして、いろんな委員とか活動とか、ボランティアも含めて、やらせていただいております。1番長く続けたのは、中原区の音楽祭事業です。In Unityという音楽祭事業の実行委員長を15年やらせていただきました。さすがに交代しましたが、他にもやらせていただいております、とにかく川崎のために何かやっていきたいとか、街のためになることをやっていきたい、川崎をもっと好きになってもらいたいという市長のメッセージがあったですけども、それが自然に実現できることが1番なんじゃないかなと思っています。

好きになってくださいではなく、自然に好きになれるような状況を作っていくことを目指したいと思って、日々色々考えながらずっと仕事をしています。この機会にも素晴らしい皆さんとご一緒できることを嬉しく思っていますので、2年間頑張りたい

と思います。

高田委員

本年、川崎市市制 100 周年の節目となる年に、当社は本社事務所を創業の地である川崎市に移転しました。1938 年以来、武蔵中原駅前に「富士通川崎工場」として拠点を構えてきましたが、本社移転にあわせ事業所名称を「Fujitsu Technology Park」に変更しました。

また、当社は、コロナ禍であったが 2020 年 7 月に新しい働き方として「Work Life Shift」を発表し、ビジネスや業務の目的に応じた最適な働き方を社員が自律的に選択するとともに、「働く」ということだけでなく「仕事」と「生活」をトータルにシフトし、Well-being を実現するというコンセプトで進めてまいりました。その結果、現在の出社率は国内平均で 25%とテレワークが定着しています。「Fujitsu Technology Park」は再開発も検討しており、次の 100 周年を見据えた川崎市の発展に微力ながら貢献してまいりたいと思います。

個人的には私は東北地方の出身で、皆さん川崎出身の方が多いようですが、私のようにふるさとが元々あり、過ごしやすい、働きやすい、利便性もあり住んでいる人もいるということを、皆さんと共有していければと思います。私は秋田も好きなので、このようにいろんな人が集まるのも川崎の良さかと思っていますので、これからよろしく願いいたします。

竹内委員

今回の私の肩書きである川崎市政策審査評価委員会の委員には 2 種類ありまして、1 つは、いわゆる学識経験者や、大学の先生などの立場のもの、私はもう 1 つの市民委員という立場でその委員会に参加しています。実はこれ以外に肩書きがなく、今はいくつかのボランティアを中心とした生活をしております。例えば、外国人と日本語の会話をするというボランティアをしております。私自身のバックボーンは、以前は会社勤務をしておりまして、川崎にも事業所のある会社に長年勤めていました。キャリアとしては企画が長いです。あとは、財務の責任者とか事業のマネジメントとかです。私自身の経歴は中部地方の出身で、大学は東京ですけど、会社に入って何か所か転勤しております。川崎の事業所に勤めたこともあります。

今、川崎区在住でして、一時期に中原区に住んでいたこともありますが、一旦横浜に移りまして、その後川崎に戻ってきて、川崎区は通算 29 年ぐらい住んでいましてだいぶ詳しくなりました。私には大学生の子どもがおりまして、川崎の将来を子どもの目線で考えた時に非常に気になっているところで、日本の中で川崎は非常にポテンシャルが高い都市で、人口もこれから数十年間は増えますが、課題もたくさんあります。今回、この市史の懇談会に参加させていただくことで、やりたいと思っているのは、この市史を見て、小学生、中学生が将来に夢をもってくれるような、未来に繋がる

る歴史という形でうまくまとめられたらと考えています。皆さんのお話を聞いていても、多士済々で私自身、非常に刺激を受けております。この2年半、3年ぐらいよろしくお願ひしたいと思います。

中村委員

中村と申します。私には小・中学生の子どもがいます。私の出身は中国地方なのですが、こちらに来て、子育ての街として川崎を選びました。活動の原点は、こういうのが街にあったらいいなというのを街でやっているつもりです。

麻生区では子ども食堂をやったり、地域の掃除というグリーンバードの活動をやったり、今は小学生とか中学校の皆さんと、街のいろんなところの施設を回りながら、こどもしんぶん部もやっています。

各区でやっているのですが、本当にざっくり言うと、宮前区では、今の緑化フェアに繋がるのですが、里山保全、生田緑地のとんもり谷戸にずっと入っていて、それは竹灯籠を作るきっかけになりました。そして、宮前区の協働事業もあって、3年目になるのですが、毎年ちょっと違うことをして、初めは平瀬川のことをやっていて、その話を聞いた時に、川の流れによって街が発展してきたと言われる方に色々教えていただいて、すごいなと思った1年目でした。2年目は川が発展の時に二ヶ領用水の話が出て、麻生区の琴平神社に二ヶ領用水の昔の資料が残っていて、二ヶ領用水が通っていない琴平神社がなぜ二ヶ領用水の管理をしていたかというお話を聞いた時に、1番平等だからという話を聞いたりして、川が流れていると自分のところに水を流そうとするみたいな話があって、全然関係ない麻生区にある琴平神社でやっていた、そういうまちを知る時に、歴史を紐解いて、今こういう街があるとわかったのがすごく楽しいなと思いました。

宮前区では、その協働事業の流れで獅子舞の歴史を学ぶ機会があって、川崎市内には獅子舞が3つあります。その中で、江戸時代から続く獅子舞の継承をしたい、この継承の問題って、高齢化でなかなか次の世代が現れない。踊り手さんもどんどんいなくなるのですね。コロナ禍が3年あって、ずっと踊りがなくなっていると、踊る人がなくなり、今度伝える人もいなくなってしまうということもあったので、そこに踏み込ませていただいています。ほんとに100年以上の歴史に、こういうまだまだ新参加者が加わっていいのかなと思いながら入ったら、快く受け入れてくださって、子どもたちも真摯に受け入れてくださって、子どもたちも本当に自分が踊りたいので、知ると、やっぱり好きになってやりたいという子どもたちが多くて。ですので、歴史を紐解くのもすごく楽しいなと思っています。

中原区では、まさに明日から始まる「なかはら子ども未来フェスタ」を地域ケア推進課と一緒にやらせていただいたり、SDGsのイベントをやっていたりします。それでSDGsに関わる学校の授業に関わらせていただいております。最近、緑化フェアか

ら始まり、SDGs と、なかはら子ども未来フェスタで、先ほど言っていた 11 月の「みんなの川崎祭」があります。

川崎祭がやっている間に、11 月 2 日は、川崎小学校の子どもたちと、SDGs を一緒に学んだ上で、ペットボトルツリーを川崎ルフロンに今度点灯することになります。子どもたちと一緒に学んで、最後、かたちにしていくのがすごく楽しくて、こういうのがあったらいいなというのをまちの方が協力してくれて、一緒にやっているのが、今の私なのかなという風に思っております。

今日も関心を持っているのは、皆さんのお話を伺うことがすごく楽しいなと思っているのと、これを引き受けた時に 1 つお願い事をさせていただいています。

こんなに素晴らしいものが絶対にできるはずだから、本もいいですけど、本がみんなに配られるのはゴールでも全然良いのですが、もっと常に手元にあるように、川崎の全小学生に下敷きとかになって、まず下敷きを届けて。素晴らしい冊子 1 冊が小学校 1 校 1 校にあるのも、ちょっともったいないかなと思っていて、何を形にしていくかはこれからだと思いますが、いいものができて、例えば年表でも地図でも何かができたら、下敷きになってこういう市史というので、「川崎はすごく楽しいところだよ」ということを川崎の小学生みんなに伝わると嬉しいです。

ご意見を 1 つ言わせていただいた上で、ちょっと予算的に難しいかもしれませんが、そういう気持ちで来ましたので、よろしくお願いします。

にしにし家委員

川崎市多摩区の登戸付近のグルメを Instagram で投稿している夫婦、にしにし家と申します。なんでここに立っているのかもよくわかりませんが、元々夫婦で週末とかにご飯を食べに行ったら、食べたものを投稿するというアカウントだったのですが、それをやっていくうちに、街でよく歩いているとその常連さんの声がすごく賑やかで、賑わっているお店があって、入ってみたいけど入りづらいなというか、気になるなというところに、何度か往復して、他のお店でお酒を飲んでから頑張って入って見たら、その常連さんのおじさんたちが話しかけてくれて、すごく楽しかったなって、という経験がありました。そういう意外と関わると街も楽しいのだなという経験を得まして、それ以降、そういう風にいろんな人から求められたら、関われようとするとか、何かイベントがあったら参加するようにするということをしているうちに、多摩区 PR アンバサダーというものになりました。グルメの投稿も、多摩区グルメを多摩区の皆さんに知ってもらおうという、多摩区 PR アンバサダーをやっています。

それで、まちも暮らしも「関わりを持つと、楽しくなる」という言葉を知り合いの多摩区の人から聞いて、まさにそれだと思って、ご飯を食べるだけでなく、ボランティアに参加したりとか、ゴミ拾いとかに参加したりして楽しんでいこう、ということをやっているのが我々にしにし家夫婦の 2 人です。以上です。

皆さまと関わりを持って楽しく暮らしていこうと思います。

羽賀委員

川崎ワカモノ Lab という団体もやっているのですが、普段はまだ学生です。来年から社会人になる予定です。

川崎ワカモノ Lab は、川崎で出会った同じぐらいの子たちと一緒に、3 年前ぐらいに立ち上げた団体で、若者と地域をつなぐきっかけを作るという目的で、街で自習室を月 1 回で開催していたり、Note で情報を発信したりしています。すごく緩い団体ですけど、そういう活動をしている感じです。

普段大学では、私は街づくりとかデザインの研究室に所属していて、街の景観とか風景とかにすごく興味があります。なので、今回のこの話も、どのように川崎の今までの歴史をわかりやすく、面白く、いろんな人に伝えていくかは、私の研究室でやっていることにも繋がるのかなと思っています。特に興味があるのは、風景の見方を変えるツールの制作を研究室でよくやっています。冊子もそうですが、ワークショップだったり、地域のお土産を作ったりみたいなこともやっているの、そういう知見を活かせたらなと思っています。

福森委員

かわさき市民活動センターは、ここからすごく近い、中原市民館と同じ建物の中に入っています。ボランティア市民活動を応援する中間支援の機関です。実は川崎 7 区のうちの 6 区の子ども文化センターの 41 館を運営していて、その下のわくわくプラザもそうです。職員は臨時職員を含めて 1,000 人ぐらいいる結構大きな財団です。

僕は市民活動を応援する部署でずっと仕事をしているので、ここにいらっしゃる方の何人かとはお知り合いの方もいるんです。やはり川崎市は市民活動がすごく活発だねと、他都市の人からよく言われますけど、川崎市の人からも言われます。

市民活動は、地域の課題解決とか、今より良い未来を作るために、素晴らしい活動をしているので、市民の誇りであるなと思っています。僕自身もそういう仕事に関わって、すごく誇らしいです。川崎市のそういう市民自治を高めている皆さんの活動を応援しているということを、この市史にも反映させたいなと思っています。それぐらいしか僕の役立てるところがないかなと思っているので、川崎市内で活躍している色々な方の紹介をどんどんしていきたいなと思っています。

望月委員

神奈川県立歴史博物館の望月と申します。なぜ県の博物館の人間がここにいるのだと思うかもしれませんが、実は 8 年前までは川崎市民ミュージアムで学芸員をしておりました。開館準備から 30 年ほど川崎のほうで歴史資料の研究・調査をさせていただいておりました。川崎には非常に愛着を持って、今でも様々に調べることをさせていただいています。年に 3 回か 4 回ほど依頼され、時々あちこちの市民館で講演

をさせていただいたりしているところです。

30年間で、川崎区から麻生区の方々に数多く交流させていただいて、私自身も非常に知らないことを勉強になったところもあります。そんな点で、少しでも100年というちょうどの機会に、若い世代に向けての市史作りということで、今までのわずかな経験ですけど、そういうことが少しでもお役に立てられればということで引き受けさせていただきました。今関心のあることというと、仕事のことになってしまうんですけども、ちょっと硬い話ですけど、博物館法という法律が今年の4月に改正されました。どうしても博物館という古いものがあったり、敷居が高いというイメージがあるのでですけども、法改正をもとに、いわゆる文化・観光の面で、また地域の様々な団体と連携をしながら博物館活動をするように、ということが法律にうたわれています。これからどうしようかなと、全国の博物館が悩んでいるところです。こうした機会にそういう市民活動されている皆さまと交流することで、改めて勉強させていただければと思いますので、2年半よろしくお願いします。

（次第一5） 議題説明

事務局から第1回編集懇談会の議題説明

今から作ろうとしている記念市史とは、読者が知りたいとか、知ってもらいたいテーマや議題を載せた市史を作りたいというのが目的です。読者は川崎市民ですので、川崎市民がどういったテーマを知りたいのか、知ってもらいたいのかということを吸い上げ、拾い上げ、練って、形にしていきたいという大きな狙いがございます。

こういう本の制作に広く市民の意見を取り入れるのには、どういった手法とかツールが良いのか、皆さまのご経験であったり、ご知見であったり、そこからお話が進められたらいいなと思って、この議題を設定させていただきました。

（次第一6） 円座 座談会

事務局から議題説明の補足

設定議題をすぐに議論するのは難しいので、まずは「誰向けに市史をつくるのがよいか」、「その読者にはどんな話題を提供するのがよいか」という設問に置き換えます。

にしにし家委員

まずはやっぱり川崎市内の人だと思いますね。もしくは川崎市が地元で途中から他のところに行った人というのもあります。私たちが投稿でいつも多摩区のことを投稿しているんですけど、「元々は多摩区にいましたよ。今こんな感じになっているんだ。」みたいなコメントがついたりするので、川崎市出身で他のところに行った人も意外と気になるかもしれないと思います。

落合委員

やっぱり「市民に」という気持ちはあったんですけど。

今回はとにかく幅広い層に見てほしいということで、その意味ではやっぱり、まずは個人的には、「川崎市史」という言葉自体は、副題というか、最後や端っこには書いてあったほうが良いなと思います。（本の書名は、）もっとわかりやすいネーミングで作ったらいなと思います。

また、下敷きにするという話もあったんですが、やっぱり一目瞭然で、例えば川崎市のどこに行けば何があるのかという、目で見て分かるようなものがあった方が分かりやすくなると思います。

そして、見るだけではなくて、歩いてみようとかのきっかけ作りになる本になったら良いのかなと思っていました。

ちょっと質問の意図とずれているかもしれませんが、以上です。よろしくお願いします。

事務局

ありがとうございます。ごめんなさい、ちょっと掘り下げてもよろしいですか。今、この15分後に会話をしていくアウトプットまでお話をいただいて、ありがたいです。ターゲットを掘り下げていった時に、幅広い層というのは、キーワードかもしれないですが、興味がない層。というか、面白いものをしっかり作って、そのもの自体に興味を持ってもらって、アクションまで繋げていこうという行動理論のところも核だと思います。

言葉として表すと、市史とか、まちのこととか、そういうものにまだ興味がない層というところ。MECE（漏れなく、重なりなく）な状態で分けると、つまり曖昧なワードがない状態で分けると、興味がない層はわかりやすいのかなと思います。落合さんが思うこの川崎市史とか、川崎のまちのこととかに興味がない層はどういう方々をイメージしていますか？例えば、若者とかのイメージでしょうか？

（大城委員が挙手）

大城委員

子育てフェーズになってここ（川崎市）に来た人間からすると、子どもたちが学校で川崎市の歴史を習ってくるんですよ。でも、私は全然知らないのです。だから、関心がないというか、全然知らない人もいると思います。川崎は流入世帯がめちゃくちゃ多いまちだから、引っ越してきた時に市の暮らし方みたいな冊子をもらうじゃないですか。あれぐらいのイメージで、引っ越してきた人はみんなもらうみたいなことです。

知りたい、だけど、どこに行ったらすぐ教えられるかよく分からないから、子どもの教科書をもらって見るのだけど、子どもの言葉でしか書いてないから、大人にはも

の足りないと思います。

事務局

なるほどですね。もしかしたら「興味がない層」と決めているよりかは、興味がある人にも興味の機会を与えていないから、結果的に興味がない層になっちゃっているじゃないかというところですよ。

確かに言われてみると、自分が住んでいるまちの歴史はよく知らないですね。ちなみに、今皆さんこの川崎以外にも住まれている方もいらっしゃると思うんですけど、例えば、自分で自分のまちの歴史を30分間講演してくださいと言われて、ある程度の雑談レベルとか、居酒屋とかで喋るレベルでもいいですけど、できる方いらっしゃいますか。

(何名かの委員が挙手)

事務局

すごいですね。そこで発展させ、また後ほど大城さんにお伺いできればと思うんですけど、まちを語る方々の目線でお伺いすると、どのタイミングでまちに対し関心を持つようになったのですか。それが結果的に我々の届けるターゲット層のきっかけになると思います。

反町さんは、どのタイミングで自分がまちを知ったというキーポイントになったのですか。そのタイミングを教えてください。

反町委員

さっきも言ったんですけど、私、生まれも育ちもずっと川崎で、川崎から1度も出てないのですね。私の場合は、「これ!」というきっかけはなかったですけど、「このまちに生まれて本当に良かった」とか、「このまちに育ててもらった」という気持ちが自然に育っています。だから、1つには、このまちで自分がやりたいと思ったことがいくつかありまして、いつもそれをこの川崎だと、実現できる環境とか、それを支えてくれる人とか、応援してくれる人とかがいて、いつもそれができてきたのです。それはどこの街でもできることではないから、本当に川崎はいい街だなとか、それを逆に川崎に恩返しをしたいなという気持ちがあります。そういう気持ちを持ち始めたのは、20歳ぐらいの時です。実は10代の時から一生懸命で、川崎でいろんなお祭りをやっていたりしていたのですよ。そこが私の原点です。地域の人が本当に応援してくれて、人情が熱いし、自分に何の利益もないのに手を貸してくれる、そういうことにすごい感謝をしたところから始まっています。

事務局

なるほどですね。ありがとうございます。面白いなと思ったのが、反町さんの歴史で言いうと、長年住んではいたけれど、住んでいるだけだと、歴史だったりとか、まちのことだったりとか、知ろうとするきっかけにはならなかったということですね。

そこから言うと、したいと思ったことがこのまちはできるということに気づいた時に、そのドライブしたというところがあると思います。

反町委員

そうですね。まちのこととか、当然知らなくちゃいけないと思いました。

事務局

なるほどですね。もしかしたら、市史にはいろんなパートがあると思うんですけど、アウトプットはまた私から言うわけじゃないですが、「新しいことをちょっとしてみたいな」だったり、「こんなことできたらいいな」だったり、それこそ今回いらっしゃる川崎ワカモノ Lab の方々のこととか、人がこれを見た時に、「川崎って頑張ればこんなことができるんだ」、「こんな先輩たちがいるんだ」みたいなことがあったりすると、それも 1 つ人間の歴史のことになると思います。ターゲットとして新しいことをしたいと思っている人にするのも、面白いかなと思いました。ありがとうございます。

そうしましたら、次は嶋田さんお願いします。

嶋田委員

なるべく短めに、朝まで行かないように話します。私、20 年前に（市内に）越してきたわけですけど、やっぱり子どもが小学生の時に地域の勉強をするんですね。うちの子どもも、幸区内の小学校ということだったのですが、小学校のすぐ裏側には山があって、昔の歴史の話を子どもが聞いて、太田道灌という方がそこにお城を建てようとしたという話も子ども経由で知ったんですね。その後、日吉中学校部地域教育会議での活動がありまして、私はそこでリーダーもやっているんです。日吉中学校の地域教育を考えようみたいな団体です。教育について、皆さんそれぞれ考えもある中で、地域を愛する、地域を学ぶみたいな活動にしようということで、「日吉」ということをだじゃれ文言で、「Hi4City（ひよシティ）」という言葉を使っています。片仮名でひよシティではなくて、Hi4City です。なんで Hi4 シティかというと、日吉には 4 つの「Hi」があります。1 つは「ヒストリー」、歴史です。縄文土器も弥生式土器も貝塚も加瀬山にあるんです。川崎の唯一の国宝も日吉から出土しているんです。すごく歴史のあるところですよ。もう 1 つが加瀬山の山（「ヒル」）です。それから、うちの近くには、日本唯一、この間までアジア唯一の量子コンピューターがありまして、ハイテクの研究所がたくさんあって、慶応もあります。「ハイテク」の「Hi」。それから、各町内会にお祭りがあって、お祭りが盛んに行われていた、「ハイテンション」ということですね。

この 4 つを掲げて、「Hi4City（ひよシティ）」という風に、地域ブランディングみたいな形で活動しています。その活動の一環で、子どもたちと一緒に地域の文化財とか、古いものを回っていて、それは教育委員会に申請すると、地域文化財として

認定されるんですね。その活動をやっている、この間、小学校の子どもの総合授業に呼ばれて、「その地域の宝物を探して申請すると、市の宝物として認定してもらえるんだよ」みたいなことを小学3年生に言ったら、みんなは「宝物はどこあるの」みたいな感じで目を輝かせてくれて、「あそこにこんなものがあるでしょう」と言って、「行く行く、今日帰りに見に行く」みたいに、すごく食いつきがよかったなと気づきました。

だから、やっぱり小学生はそういうものに対して偏見がないですね。「鉄は熱いうちに打て」じゃないですけど、歴史がつまんないとか、興味がないという前の段階で、子どもたちにこういうのを見せるのも1つ（のきっかけとして）良いのではないかなと思いました。

そしてミュージカルをやっている中で、逆に子どもたちは歴史のことに詳しいのだけど、大人が加瀬山の歴史も全然知らない人が多かったので、だったら分かりやすい形でやろうということでミュージカルにしました。ミュージカルの夢としては、川崎の観光名物みたいなものになってくれたらいいなと思ったりしています。ミュージカルにしつつ、実は川崎市オリジナルの吹奏楽曲を今作っているところです。これを全国大会とかでやってもらえると、太田道灌と夢の城の吹奏楽版は「これなんだ」と全国の人に思ってもらえるのも狙っています。

なので、僕は子どもと市外の方に「川崎ってこんなに楽しいところだ」ということを全国の他のまちの方に思ってもらいたいな、と思います。

事務局

ありがとうございます。まさに結局は色々繋がってくると思いました。小学生はこれからいろんな興味を持つというところで、勝手にスポンジ力と言いますが、いろんなものを吸い上げて、どんどん蓄えていく力がすごく多いですね。そういう小学生にもしっかりフックを掛けていきながら、でもこれだけはダメなので、先ほどいただいた落合さんのご意見からいうと、しっかりとそういう方にも楽しんでもらえるような見せ方をしていこうね、でもそれをしっかり広げていくことによって、今度は大城さんにいただいたお母さん・お父さんたちにも繋がるようなコンテンツもしっかり入れていくこととか、皆さまの意見をうまく繋げていければと思います。ありがとうございます。

対面なので、次は中村さんお願いします。

中村委員

私も川崎に引っ越してきて、この場所はすごく自然があっていいなと思って選んだんですけど、でも何があってとか全く知らない状態で区役所に行って、子どもが生まれてからも都度つど区役所に行って、子どもが生まれるまでは、川崎は仕事と家の往復だけで、まちを楽しむ余裕なんて本当になかったんです。子どもが生まれ

て、それこそ母子手帳もらって、保育所にいって、街を回るようになって、ようやく公園とかに出たりし始めたと思います。子どもと共に街を知ったというのは、本当に嶋田さんと同じで、場所だけじゃなくて、どういうイベントがやっているかというところの方が、もっとフットワークが軽くなり、行きやすいと思います。1つ例をあげると、どんど焼きとか、そういう「地元ならではの」状況とかがわかると、すごく足を運びやすかったなと思っています。地域に根差した情報と一緒に、子どもたちがその地元のことを知って、そのまま成長するじゃないですか。外に出た時に、川崎はすごいんだよ、と言ってもらえるような願いもあったりして。例えば、「〇〇初」もそうだし、「これってすごい」という「すごい」もそうだし、「こんな素敵な方がいる」でも、もしかしているのかなとか、地域のいろんな感性のナンバーワンがいると思いますけど、もっとわかりやすい地元発の川崎の情報があると面白いかなと思います。

事務局

ありがとうございます。「〇〇初」とかも1つの歴史だと思っていて、例えば、中村さんがまちを子どもと一緒に歩くタイミングに、「こういうのを知りました」とか、「こんな初が川崎あるんだ」とか、色々知っているものを、仮に誰かに紙・冊子として見せるようになった時に、誰に1番届けてみたいですか。

中村委員

小学生とか、学生ぐらいかなと思います。そこが1番エネルギー値が高いからです。働いている時はそのような関心すら湧かなかったことが正直ありました。

なので、やっぱり子どもだと思います。

鈴木（ひ）委員

皆さんと話していて、まちの魅力を再発見するみたいなイメージが湧いてきました。先ほど川崎市出身と話したのですが、高津区民歴20年以上で、1番最初は半蔵門線沿線に住みたいというところから、選んだだけです。

結構外から来ている人は、学校だったり、勤務先だったりとか、そういうところからたまたま住んでいて、普通に機能的に生活しているだけじゃないかと思います。意外とブラタモリとか見た時に、この辺の細い道があるのは元々多摩川から水を引いていた跡だったとか、そういうちょっと面白いことを知ると、たまたま住んだ場所にいるけど、実は色々歴史があって面白いかもしれないと分かって、より愛着が湧いたりします。

なので、別に川崎市に元々住んでいる方でももちろん良いですけど、よそから流入してきて川崎に住んでいる方にもより楽しんでもらえることになると思います。

事務局

なるほど。すごく平たく言うと、ブラタモリを楽しんで見られるような層ですね。ペルソナ（顧客モデル）で言うと、多分、男性の30代後半から、歴史と、住んでい

るところに、愛着を湧けるような方ですね。

鈴木（ひ）委員

確かに、お子さんがいると、やっぱり出かけるきっかけになるので、家族連れの方、家族とお子さんもいて、「たまたま多摩川」の近くに住んでいる家族だと思います。

事務局

確かにそうですね。たまたまその地区に住むというパターンは多いですし、川崎に対するリサーチにも、便利というところがすごくポイント高いですね。なので、そう考えると、その人たちにきっかけを提供して、よりまちを好きになってもらう、まちで遊んでもらうというところがあると、よりシビックプライドも上がってくるのかなと思います。一旦ターゲットとして、「たまたま多摩川」沿いに住んでいる人と、ブラタモリというのがキーですね。ありがとうございます。

そうしたら、高田さんお願いします。

高田委員

今、本屋さんに行くと、川崎市のガイドブックはまだ少ないと感じます。やはり私も東北出身なので、川崎市が行ってみたい街や、住んでみたい街になってほしいなと思っています。対象を川崎市に住んでいる人にするのはもちろんですが、全国でしたり、海外から川崎市に行きたい！という方をどのくらい受け入れるかだと思います。

企業とすると、やはり川崎市で働いてみたい、住んでみたいと思ってほしくて、それには魅力的な街である必要もあります。地域から出てきた時にあそこで働きたいとか、そういう風に思ってもらいたいです。グローバルな都市、例えば、ニューヨークで働きたいとか、そこに憧れて、世界中を飛び回って働いている人もいます。グローバル感が大事なかなと思います。海外の方が居る街は活気があり、それをふまえると、今回の市史は英語版を作るとか、どこまで広げていくか考える必要があると思います。

事務局

その視点はすごく大事で、川崎はやっぱり先ほど鈴木（ひ）さんにおっしゃっていただいた通り、「便利」というイメージが相当高いのですよ。それは市民のアンケート調査でも1番高いですね。

ただ、その中で、観光においてもそうですけど、これだけ羽田から近くて、要は都心が近くても、結局通過や乗り換えのまちになってしまっているところがすごく大きいんですね。

それこそ緑化フェアもそうですし、今フェスティバルを多く開催されているんですけど、紐解いていくと意外と歴史が深いまちです。見ていこうと思ったら面白いこといっぱいあるんですね。

今もサイエンスパークをはじめ、いろんな新しいものができてきています。街づくりも圧倒的に、川崎市周辺も開発されている中で、もっとまち自体が面白いまちだよというところをプロモーションしていくのがすごく大事です。それは最終的には多様性の街ということで住んでみよう、訪れてみよう、観光してみようということに繋がると思っていますので、私も個人的な意見ですけど、全国の人とか海外の人が見ても楽しい冊子という市史になれることを願っています。

高田委員

今、小さいお子さんたちを見ていると、スマホやタブレットですぐに世界と繋がることができ、それを 1.5 倍速で見えています。スピードも速く人と繋がる感覚もボーダーレスになっています。そこも意識しておいた方が良く、動画提供やコンテンツの見やすさは重要と考えています。

竹内委員

私は後半のコンテンツに関係して、皆さんと一部重りますが意見が 3 つあります。

ターゲットの一つはやっぱり外国人だと思います。川崎は結構、外国人の比率が高いですね。確か 3% くらいいます。私が住んでいる川崎区の西半分には、10 人に 1 人は外国人が住んでいます。外国人向けの日本語ボランティアをしていると、日本で数年働いて帰る人が多いんですけど、長期で住んでいる人もだいぶ増えていると思います。なので、そういう人たちに川崎のことを知っていただくということが非常に大事だと思います。予算の問題はあると思いますが、例えば、数十か国の人がいると、言語で言うと多分 10 近くの言語が必要ですね。理想を言うと、今回作る記念市史はその 10 か国語で作るというのもありますが、多分子算的に無理なので、ダイジェスト版を作ったり、さっきの下敷きと同じ発想ですけど、A4 とか 1、2 枚でいいですけど、そういうダイジェスト版を 10 か国語で作る。そういうことをぜひ考えていただきたいです。

2 つ目は、皆さんがおっしゃっているし、今回のメインターゲットは小学生ですね。私、小学生向けのボランティアをやっているんですけど、やっぱり彼らは歴史にまだ興味が無いのですね。一方で、私の子どもらが市内の高校に通っていた時、生徒は川崎各地から集まってきて地域で全然意識が違うんですよ。私は、それを南北問題と呼んでいるのですが、いわゆる北部というか市内の西側の区と、南部というか特に川崎区・幸区とは、だいぶ意識が違います。川崎の鉄道は全部東京から放射線上なので、皆さんがおっしゃっているように生活圏がその沿線ですよ。市を横に繋いでいるのは南武線だけなので、そもそも一体感を醸成するのが難しい市なんです。小学生をターゲットにした時に、川崎全体のイメージを持てるコンテンツを作るのは、将来のために非常に大事だと思います。ぜひ皆さんとそのイメージを作っていけると、いいかなと思います。

最後に、かつて川崎は産業都市と言われて、私よりもっと上の人たち、年代で言う
と 70 代から 80 代の方々が、日本の高度経済成長を支えてきた街です。そこで長く働
いて今も川崎に住んでいる人もたくさんいらっしゃるわけで、その人たちが、記念市
史を見て、「俺たちが頑張ったから今の川崎があるんだ」と思えるのが大事だと思っ
て、そういう視点でコンテンツを作っていったら良いなと思います。

事務局

ありがとうございます。新しいワードが出たと思います。「小学生」とか「海外の
人」というワードは今まであったんですが、「これまで川崎を支えてきた人」のワ
ードは今まで出てなかったですけど、この言葉はこの 100 周年の実に大事なキーワード
になっています。今回の 100 周年の事業でも、これまで川崎を支えてきた人と、これ
から今後の 100 年を支えていく人をしっかりと融合して、今回の色々な緑化フェアし
かり、Colors,Future,Summit しかり、みんなの川崎祭しかり、全て今後 100 年のレガ
シーになるものを作っていきましょう。それが今回 100 周年のプロモーションの 1 番
の軸になっているので、まさに市史もこれまで支えてきてくれた人に対してリスペク
トを払いつつ、これから 100 年生きていく子どもたちに対して伝えていくというところ
はすごく面白いコンテンツだなと思います。ありがとうございます。

そうしましたら、鈴木勇一郎さん、お願いいたします。

鈴木（勇）委員

ターゲットは、小学生であるとか、お年をめした方とか、外国人の方とか、色々出
てきているわけです。

小学生はやはり今後を担うということで重要ですが、先ほど少しお話が出たところ
ですが、結構小学生は学校で習っているわけですね。副読本があって、その中で、
川崎市の歴史も扱っているし、歴史新聞みたいなトピックもあったり、それは大人に
は物足りないというお話もありました。そうすると、1つやっぱり気になるのは、そ
の親世代というところなのかなと。やはり子どもと親との対話は非常に重要と思いま
すけど、子育ての親世代にアプローチするようなものがやっぱり不足しているような
気がします。感覚としてですが、実は大学生ぐらいまでは、普通の方は歴史に興味を
持っていないですよ。実際、私、学生時代に一時神奈川県内の県央部に住んでいたこ
とがあるのですが、住んでいた時に、その地域のこともなんか大して気にもしてなかつ
たです。ところが、30 代、40 代ぐらいになると、あの時ももっと勉強しておい
たほうが良かったなと後になって思い出すわけですね。

人それぞれですけど、やっぱりある程度それを受け入れるようになる年齢がありま
す。30 代とか 40 代とか、皆さんそのあたり忙しいというところもありますが、あえ
て訴えるのも 1 つの手かなと思います。

事務局

子どもがいる親世代に対して、コミュニケーションが取れるようなものはどんなものでしょうか？今回の市史は、この人たちが楽しんで読んでもらえそうなものはありますか。

鈴木（勇）委員

非常に難しい質問ですね。

事務局

そこはまた次回などで色々お話していただければと思います。

私が個人的に思ったのは、シンプルに絵本とかも 1 つありだなとか思います。

子どもに読み聞かせて、子どもになんか読み聞かせて、しょうもないものでも喜んでいたりするので、そういうものとかも 1 つなのかなとか思います。「子どもがいる親世代」が新しいキーワードで、そこにうまく繋げていければなと思いました。

そしたら、ちょうど大学生世代の話もあるので、羽賀さんお願いいたします。

羽賀委員

私もまさに大学生とか、高校生が結構ターゲットになるのではないかと考えています。私の N=1（自分の主観的・体験的）な、個人的な話ですけど、私は都内の学校に通うので、高校から川崎に引っ越してきて、そこから川崎に住んでいます。やっぱり利便性の良さから引っ越してきた学生は割と多いんじゃないかなと思っています。かつ、私の場合は、まちを知りたいと思ったきっかけが、大学受験に向けて、大学で何を学ぼうと思った時に、まちづくりをやってみたいかもと思ってから、まちのことを知りたいと思ったのがあります。

体感ですけど、最近、高校生の中で、まちづくりをやりたい人は割りと、結構増えていると気がします。やっぱり大学生とか高校生とかで、もうちょっと地域のことを知りたいという世代がわりといると思っていまして、そこにフォーカスすると考えています。かつ、外から来た身としては、小学生で歴史を学ぶ機会を得ていないので、そこをすっ飛ばしてきた高校生や大学生とかの引っ越してきた人に向けて、というのは良いんじゃないかなと思っています。

事務局

ちょっと掘り下げると、体感として高校生が、まちづくりしたい人が増えているという話もあって、そういう子たちは、何のタイミングでまちづくりをしたいと思ったのか分かりますか。

羽賀委員

そうですね。授業で最近、総合探究みたいなことがあって、そこで結構まちをフィールドに自分のやりたいことやってみようとか、自分で動かしてみようとかの授業があったので、それがきっかけになっていると思います。

事務局

面白いですね。従来の授業は受けるものであり、今はどの授業も割とワークショップになっているとか、一方的なものじゃなくて、相互関係のあるものになっているのかなと思います。ワークショップで使える市史は多分ないです。一部白紙になっているとか、自分たちで考えましょとかの市史はないですね。そのキーワードとして、まちづくりをしたい高校生とか大学生が1つのターゲットになります。そのアウトプットとして、ワークショップとかで、ただ一方的なものではなくて、参加型ができる市史みたいなのが1つ新しいのかなと思います。ありがとうございます。

そうしましたら、阿久津さんお願いします。

阿久津委員

私の子どもは中学を受験しているので、中学から都内に通っていたので、小学校の時の記憶が薄いというか、川崎市についてそこまで興味がなかったです。都内の学校でも地域ごとに、川崎出身の子どもたちが「川崎こういうあるよね」とか、なんかそれぞれの地域の良さを自慢し合うみたいな瞬間があったりとかして、そういう時に、あんまり出てこないのが、ちょっと悔しかったみたいな話を聞いたことがあります。そういうのを知る機会があったら良いのかなと思います。

あと、子育て世代ですけど、一応、mama-on!でお出かけ情報を掲載していて、大山街道について取り上げた時があって、大山街道を歩いていくとこれだけ楽しいお店があるよみたいな、それをきっかけに大山街道のこと、そこまでは載せられなかったですけど、知っていただけたらいいなということもあったので載せたら、やっぱおさんと一緒に巡って、「巡りました」みたいな話がありました。だから、「子どもと巡ったら楽しいよ」みたいな川崎市内のマップとか、あと、ママは子どもと写真撮りたいのもあるので、こういうところでこういう写真が撮れるよとか、そういう風にするのと、知るきっかけになると思います。

やっぱ見たり、実際に触れたりとかすると記憶にも残るし、良かったよとか、ママ同士とかでまた行ってみるとか、そういう広がりが出てくるのもいいかなと思います。

事務局

ありがとうございます。まさに、そういう子どもや子育て世代に対して、ただ場所を知るだけではなくて、触れるきっかけとか、見られるきっかけとかが1つ提供できるような市史、体験型市史ができると、面白いですね。

望月委員

ほぼほぼ出てきたと思いますけども、市史というよりも情報市史みたいな形で、その関心がある人たち、子ども含めて、子育て世帯の人も含めて、川崎を自慢したいところ、誇りにしたいところを集める形で、1つにまとめると、同世代の人たちが「こういうところが川崎の誇りなんだ」という気づきになるような冊子みたいなものが

きればいいのかと思います。それがミクロな川崎市民だけではなくて、もっと広く、最初にもあったように、全国レベルで川崎を知ってもらう1つのきっかけにもなるのかなと。

先ほど、鈴木（ひ）さんがブラタモリの話をしていましたけれども、あの時の案内役は私です。その後で、NHK からその番組のアンケートが送られてきたんですけど、やっぱり全国の人には川崎を知っているけど、川崎にはどんなものがあるか知らなかったとか。あれ（番組）を見て、なるほど、今度1回行ってみようかな、という意見が多かったようです。そのような反応がNHK を通じてからきたものですから。やっぱりあのような番組の影響力もあるでしょう。そういう情報発信っていうのがこれから必要になってくるのかなと思います。

大島委員

皆さんからも出ていると思うんですけども、誰に向けて、というのは逆に読ませたくない人はいないので、誰でも良いのかなとは思っています。なので、コンテンツのところを少し考えたほうが良いのかなと思います。

私は今、例えば自分の仕事としてはそういうふうに思っていました。一応、市史、歴史の本ということを考えると、情報というよりは、もう少し歴史のところを遡って、「こういうことがあった」とか、「こんなすごいところがあるんだよ」というようなことを扱ったほうが良いのかな、と話を聞きながら私自身は思っています。

事務局

そうですね、どちらかというと、総括して、それを最終的にどう見せていくのかというところでありつつ、歴史の本として、全世代に対して、まさにおっしゃる通りだなと思います。ありがとうございます。

福森さん、お願いします。

福森委員

ご意見は出尽くしたかなと思うんですけど、やっぱり無関心層に、知ってもらおうというのは良いのかなと思います。それは「川崎都民」と言われているような人とかでも良いし、市外に住んでいる人でも良いです。

この間、神奈川県の人にふるさと納税について意見聞かせてくださいみたいなことがありました。ふるさと納税の返礼品にこの市史があるといいのかなと思っていました。

あと南部と北部、他の委員も言っていましたけど、やっぱり地域性があって、すごく特性が違うので、南部の人には北部、北部の人には南部を知ってもらうようなきっかけになると良いのかなと思いました。

僕も最近 YouTube をよく見ていまして、街歩きとかの動画で、このコンテンツが分かるようなものがあるといいなと思いました。

事務局

まさに最初に出てきた、興味がない人に対しても、しっかりと楽しいと思ってもらえるようなコンテンツ作りということになるのかなと思います。返礼品も面白いですね。川崎市は輸出ナンバーワンですかね。ありがとうございます。

最後に、大城さん、アウトプットのところ、年齢層については言っていただきましたが、こんなコンテンツを提供したらいいじゃないかのところは聞き漏れていたのをお願いいたします。

大城委員

さっきの話にも出したんですけど、流入してきた世代・世帯は、この先もめちゃくちゃ多いまちだと思うんですね。だから、子ども時代はここで育っていないが、小学生の子どもを持つ大人世代が出てきます。そういう人たちに届ける、暮らすための冊子、引っ越してきた時にもらう冊子みたいなものが読みたいなと思います。

事務局

確かに、そこ２段階もありますよね。市史といういきなり重いものに思われちゃいますけど、それこそ１発目は軽くちょっと読んでもらって、続きは動画コンテンツとか多分色々あると思うので、この先はより深く知りたい人はここ、それもターゲットに合わせて、子どもだったらこういった絵本版もあるよ、みたいなのがあったりとか、いろんなパターンができると面白いのかなと思います。

(次第一７) 総括

事務局

ありがとうございます。すごく貴重なご意見をいただきましたので、まとめさせていただきます。

(全体Q & Aは実施せず)

以上